

ジュネーブの MB&F M.A.D.Gallery にて、現在、ボブ・ポッツによる魅力あふれる動く彫刻を展示中

このたび M.A.D.Gallery で、アメリカ人アーティストのボブ・ポッツ(Bob Potts)の手になる、エレガントなキネティック・スカルプチャー(動く彫刻)7点を展示できる運びとなった。

1850年代の倉庫に設けられた個人のアトリエで、ポッツが生み出す優美なキネティック・スカルプチャーには、飛翔する鳥やボートのオールのような自然界のリズミカルな動きの本質そのものが、独自のスタイルで表現されている。72歳のポッツは、形や動き、そして視覚的な優美さを捉える名人だ。

「私の作品は、自然界から降りてくるひらめきを形にしたものなんだ。あらゆる生き物の優美さと形、そしてそれらが互いに呼応し合う様には圧倒させられるよ。」

ニューヨーク州を拠点に、自然に対する畏敬の念を形にしようと、歯車やクランク、スライダー、レバー、鎖などを使ってキネティック・スカルプチャーを生み出すポッツ。彼は自分の作品に、多大なるクリエイティビティとエネルギーを注ぎ込んでいる。完成までに1年かかることもある彫刻は、そのひとつひとつがユニークな作品だ。

複雑そうに見えるが、彼の作品は意外なほどのミニマルアートである。最小限度の要素だけを使ってそれぞれの動きを再現しており、装飾のための装飾は何一つない。

「どの作品の動きにも、すべての部品が必要なんだ。そういう意味で言えば、形態は機能に従うのさ。」

サンフランシスコに生まれたポッツは、人間を取り巻く優美さをつねに追い求めており、彼にとって、そのエレガンスに命を吹き込む手段が彫刻なのだ。

手法とプロセス

ポッツの彫刻は繊細に見えるかもしれないが、ステンレススチールやアルミニウム、真鍮、青銅、銅など多彩な金属が使われており、その美しい作品は生涯にわたって目を楽しませてくれるようなものだ。ポッツはまた熟練した大工でもあり、木材や、人がたいてい捨ててしまうようなものも素材として利用することがある。

「目にした物からインスピレーションを受けるし、ごみ箱をあさったことも数知れないよ。」

ポッツの作品でひととき驚かされるのは、その制作プロセスだ。それこそが、ポッツの彫刻を「生きている」と感じさせる原動力となっている。ここでは、先入観に捕らわれない、直観的な作品制作の方法が編み出されている。

「あるメカニズムを使いたい、そしてそれを作品にどう反映できるか見てみたい、という思いに駆られることがよくあるんだ。それに、完成形が頭に浮かんで、そこから作りたいものを形にできるメカニズムを探すこともあるね。」

作品には力学的複雑さがあるが、CAD(コンピューター支援設計)ソフトウェアは一切使用されていない。使われるのは木工の技能であり、それを活かして棒で作った原型から距離や寸法をすべて計算して、制作する作品の構造を割り出している。

デザインはこのプロセスを経て次第に形をなし、進化してゆく。そうして完成した作品は、たいてい最初に思い描いたものとは大きく異なっているという。だがポッツにとってそれは望ましいことであり、そこから大きな満足感がもたらされている。

「作品が育ち進化していく様子を見ると、とてもやりがいを感じるよ。アートは結局のところ、アーティスト自身の進化を映し出すものだと思うかい？」

作品

M.A.D.Galleryで展示中の彫刻は、「アセンション」(Ascension)、「パー suit II」(Pursuit II)、「Gプレーン」(G Plane)、「ウイングス」(Wings)、「シンクロナス・サイクル」(Synchronous Cycle)、「デニズン・オブ・ザ・ディープ」(Denizen of the Deep)、「コスモグラフィック・ボイジャー」(Cosmographic Voyager)の7点。

ポッツは自然界にインスピレーションを求めているが、その作品は自然を単に写し取ったものではない。

「私の彫刻は、実際の動作を模倣したり表現したりすることを目指してはいないんだ。機械仕掛けの姿を通して、その優雅さ自体を形にしたいんだよ。」

ポッツの名は「羽ばたき」をする彫刻でよく知られており、たとえば「アセンション」では飛翔する翼の本質をスムーズで流れるような形に表している。翼の動きは、湖面を飛ぶ白鳥や雁の優雅な姿を思い起こさせる。滑らかでエレガントな飛翔そのものだ。

ポッツが自然に捧げる賛歌は、魚にも向かう。ポッツの彫刻「シンクロナス・サイクル」は、完璧に一体となって移動する魚の群れのシンクロニシティ(共時性)を表現している。この彫刻の魅力は、主に水が作り出す動きを地上で再現できるポッツの才能に根ざすものだ。

そもそももちろん、人間世界も忘れられてはいない。「コスモグラフィック・ボイジャー」という、正に相応しいタイトルが付けられた作品は、人が漕ぐ昔の船がリズムカルに前進する様子を表している。古代のエジプトやスカンジナビアの葬送船のように、ポッツにとって、それは魂を運ぶ船なのだ。

ボブ・ポッツの経歴

サンフランシスコで育ったポッツは、現在 72 歳。アートの世界に初めて触れたのは、兄弟でありアーティストのドン・ポッツを手伝った時だ。2 人は 6 年を費やして、アメリカの少年時代に捧げる機械彫刻「マイ・ファースト・カー」(My First Car)を作り上げた。「創作のプロセスに初めて深く触れて、私の機械作りと溶接の技術が伸びたのもあの時代だったな」とポッツは思い起こす。完成した彫刻は国内有数の美術館をいくつも巡り、ポッツもアートの世界を経験することとなった。

やがてポッツは東に拠点を移し、ハイウッド・ストリング・バンドを結成してフィドルを演奏した。しかし、機械に対する情熱がすぐに再燃。幼い頃からホッドロッドとバイクが好きだったポッツは、コルベットの後輪ステアリングを作る仕事を見つけた。

この頃、画家・彫刻家のジョージ・ローズと出会い、ボールを使った音と動きの彫刻を共同で 20 年間以上作り続けた。この時期を通して、ポッツは自分自身の作品を作らなければならないことに気づいたという。ローズの大きな彫刻の一部分を担当するかたわら、自身のコレクションとして小さな作品を作っていた。そして、独立するチャンスが訪れる。ローズがオハイオ州のバトラー美術館にポッツを紹介してくれ、3 か月に及ぶ

個展を開けることになったのだ。やがてポッツの彫刻「パーズト II」が、シュバインフルト・メモリアル・アートセンターで開催された、審査を通った作品だけが展示される「メイド・イン・ニューヨーク 2011」展で、「ベスト・イン・ショー」を受賞した。

現在ポッツは、ニューヨーク州トゥルーマンズバーグに居を構えている。